得るスキルが多かった！

たくさんの方と交流ができて面白かったです

課題を自分たちのアイデアでワクワクに変えるところが楽しかった★

仙台 2022 まちづくり若者ラボ

活動報告

みんな優しく助けてくれます

様々な視点から仙台市を知ることができたことで、まちづくりに対するイメージを変えることができた

意外と社会人多いです！

contents もくじ

03 「仙台まちづくり若者ラボ」について
事務局・メンター紹介

04 活動の流れ
ワークショップ
最終報告会

06 チーム紹介/最終報告会プレゼンダイジェスト

チームA 一日一花

チームB まなびの杜

チームC We can PingPong

チームD 定禅寺コトノハボックス

チームE シェアソビsEndai

チームF もぐら編集局

「仙台まちづくり若者ラボ」について

『みんなとつくりたい仙台がある』

仙台市では令和2年度から、若者の自由な発想を仙台の活力創出につなげるため、
「仙台まちづくり若者ラボ」を実施しています。
この事業は、若者自らが「自分ごと」として関われるまちづくりに関するテーマを設定し、
ワークショップとフィールドワークといった実践型プログラムを通じて、
そのプロセスや成果を発信するとともに、まちづくり活動の担い手となる若者の発掘・育成を目指すものです。
若い世代の参加者が6つのチームに分かれて、「まちの特派員」として自らの視点で取材活動を行いました。
各チームには参加者と同年代のメンター（指導・相談役）を配置し、プロジェクトの進捗管理や
フィールドワークの伴走支援、他団体との連携支援などフォロー全般を行い、活動をサポートしました。

事務局・メンター紹介

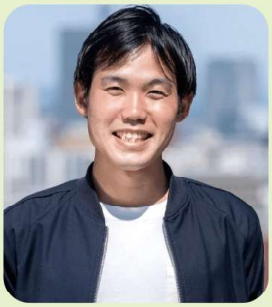
イベント企画・ファシリテーター
(株)JTB仙台支店 地域交流グループ
手島 慧さん

イベント企画・運営担当者
(株)JTB仙台支店 地域交流グループ
野村 倫太郎さん

(株)第一広告社所属
伊藤 愛発さん

住友商事東北(株)所属
加藤 海さん

地元メディア所属
丹野 裕太さん



(株)リクルート所属
小野 拓也さん

(株)Pallet所属
加賀谷 成美さん

お茶の井ヶ田(株)所属
石垣 直哉さん

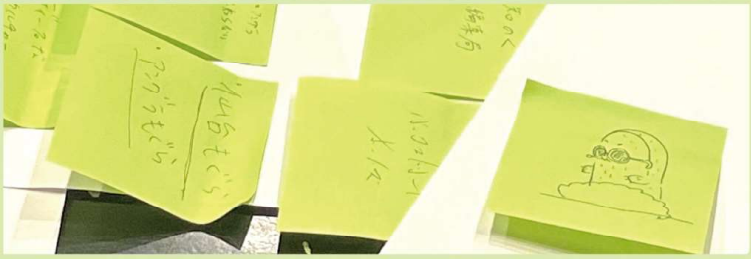
活動の流れ

全4回のワークショップでは、仙台市の部署の取組等紹介や交流、TOHOKU360編集長の安藤歩美氏を迎えての講義や、各チームに分かれてグループワークを行いました。

第1回	第2回	第3回	第4回	最終報告会
オープンワークショップ 7月2日	ワークショップ 8月23日	ワークショップ 10月4日	ワークショップ 11月10日	12月1日
フィールドワーク	フィールドワーク	フィールドワーク	フィールドワーク	

ワークショップ

- 第1回　・仙台市の部署の取組等紹介、参加者と各部署との交流
  （定禅寺通活性化室、財政課、子育て応援プロジェクト推進担当、環境共生課、誘客戦略推進課、全国都市緑化フェア推進室）
- 第2回（オンライン開催）　・安藤歩美氏による講義「地域の魅力や課題を発見するために」、テーマの検討
- 第3回　・意見交換（ワールドカフェ形式）、グループワーク
- 第4回　・最終報告会に向けた準備、グループワーク



最終報告会

令和4年12月1日、仙台市市民活動サポートセンターで開催しました。

今年度は42名の参加者が、それぞれが掲げたテーマに沿って、まちの未来を「自分ごと」に引き寄せ、約5カ月間の議論を重ねてきました。そして迎えた最終報告会では、これまでの活動を通して得られた発想やアイデア、今後継続的に取り組むアクションについて、一般観覧者及び仙台市職員等関係者の前で発表しました。

その活動の様子を、本誌及び仙台市公式動画チャンネル「せんだいTube」で紹介いたします。「自分ごと」として関わる、新しいまちづくりの形をぜひご覧ください。

最終報告会
各ワークショップの動画を
「せんだいTube」で
絶賛公開中！

YouTube

Team A

一日一花

花や緑を通じて人と人との
繋がりや交流を創造する

Mentor 伊藤愛発

Member 鈴木悠平/鎌田直也/工藤佑羽/外下和奈/門間由芽奈/高橋海渡/勝又里紗/塚田蒼

テーマ

花や緑を”コミュニケーションツール”として人と人をつなげる

Field Work フィールドワーク

フィールドワーク① 仙台市都心まちづくり課にヒアリング

フィールドワーク② 「花降る街、仙台」山田さんにヒアリング

フィールドワーク③ 映画上映会に参加

フィールドワーク④ ペデストリアンデッキ花壇植え込みに参加

フィールドワーク⑤ 定義まつり視察

フィールドワーク⑥ 定義の地域の方々と来年のイベント実施に向けた打合せ

Presentation 最終報告会 ～プレゼンダイジェスト～

仙台市が杜の都と呼ばれていることや令和５年には34年ぶりに仙台市で緑化フェアが行われることから、テーマは自然や環境が一番良いのではないかという結論に至り、仙台市都心まちづくり課の方にお話を聞きました。そこで自然環境やまちづくりとの関係性について理解を深められたとともに仙台の自然の活用について一考の余地があると感じました。

第２回ワークショップでは若者を中心に仙台市をどんどん活性化させていきたいという話をしました。そしてフィールドワークでは、仙台市内のお花屋さんを中心として花の魅力を届けている「花降る街、仙台」さんの協力を得て仙台駅西口のペデストリアンデッキの花壇の植え込みをするウェルカムガーデン作りに参加しました。その後、第３回ワークショップでは他県の事例研究の共有を行い、第４回ワークショップでは定義まつりでの企画案を考えました。大倉・定義地区をお花を使って明るくしたいという話があり、お花ロードやフォトスポット、住職さんの服装を華やかにして少しでも明るいイメージを持たせようと考えました。また、子供と参加できるハーバリウム、香水づくりなどのワークショップを開催したいと思っています。更に、来てくれた方への満足度を高める仕組みとして桜の苗木を購入して自分で植える「桜の木のオーナー」、地域住民と来訪者とのつながりのために火鉢サロンやお茶を振る舞う活動もしたいと考えています。

今後どんな活動をしていくか議論を重ねていた時に、メンターから定義山などで有名な大倉・定義地区の方々が一緒に活動してくれる若者を探していると教えていただきました。大倉・定義地区は若い人の少なさと人手やアイデアの不足が課題として挙げられていました。そこで先ほど挙がった花をテーマにした企画についてご提案させていただき、大倉・定義地区の皆さんからも観光客との交流に非常に前向きなご意見を伺うことができました。今後も打ち合わせを重ね、令和５年も桜の植樹式、定義まつりに向けて活動していきたいと考えています。

仙台市は杜の都と呼ばれ、緑化フェアも開催されます。私たちはこれまで、花や緑を単なる景観として捉えていましたが、活動を進める中で花や緑をコミュニケーションツールとして捉え、人と人とを繋げられる可能性を感じました。実は元々私たちのグループでは具体的なアクションとして緑化フェアでの活動を考えていました。そこで緑化フェアと同時期である５月に、大倉・定義地区で先ほどお話しした定義まつりでのイベントを行い、単に大倉・定義地区を盛り上げるだけでなく、緑化フェアを大きな枠組みとして捉えていこうと考えています。アクションについては３つのコンセプトがあります。１つ目は地域の日常に非日常を作り出すということ、２つ目は花と何かを掛け合わせてエンタメを創出するということ、３つ目はそれらを通じて人が交流し繋がりを創造するということです。そして目標としては「花や緑があってなんとなく綺麗で癒されていいよね」といった形で終わらせないということです。「まちづくり」というものは明日からすぐに結果が出るようなものではないと思っています。だからこそ、その場限りの一過性の活動ではなく継続的な活動をしていきたいと思っています。最後になりますが、私たちは人が街を作って人が社会を作っていくものだと思っています。私たちがこれからの仙台の街を作る一員になれるように活動を進めていきたいです。

TOHOKU360編集長　安藤 歩美氏のコメント

花や緑をコミュニケーションツールとして捉えて人と人とを繋げられるっていうのはとても素敵な気付きだなと思いましたし、継続した取り組みにしていくためにどういった効果を地域で生み出したいか目的意識をはっきりさせられるとモチベーションの維持に繋がるのかなと思いました。

Team B

まなびの杜

学びのサードプレイスで
学都仙台の優位性を保つ

Mentor 加藤海

Member 岡田雅文/神尾真大郎/千葉優花/若原大志/稲葉福音/中村天海

テーマ

高校生の「学びのサードプレイス」のあり方を考える！

Field Work フィールドワーク

自習室班
- フィールドワーク① HELLO,VISITS東北大学さんにヒアリング

キャリア教育班
- フィールドワーク① 宮城県教育庁高校教育課にヒアリング
- フィールドワーク② 仙台市民図書館にヒアリング
- フィールドワーク③ 学びのサードプレイスに関するアンケート調査

Presentation 最終報告会 ～プレゼンダイジェスト～

私たちのチームは中高生の学びのサードプレイスのあり方を考えるというテーマで活動をしてきました。中高生の学びの場所を考える自習室軸と、高校生の時からキャリアについて学べるキャリア軸、まずこの２つの軸で動きテーマを設定しました。

自習室軸では、企業に対して優秀な人材を斡旋し、大学生に対してはもっと優秀になってもらおうと、無料で自習室を提供している会社、HELLO,VISITS東北大学さんに伺いました。現在は大学生のみに行っているこの事業が、高校生も利用可能にならないかお伺いしましたが、NPOから始まり現在もボランティアのような状態なためユーザー層を広げることが難しそうであり、民間で自習室不足を解決していくのは難しいと感じました。次に仙台市民図書館へ伺いましたが、図書館は全世代のための施設であり読書を楽しむ場であって、閲覧席は参考書等を持参して自習する場ではないとお言葉を頂きました。次に、キャリア軸の観点から宮城県高校教育課へお話を伺いに行きました。そこで高校のキャリア教育は進学実績に偏った出口戦略になってしまいがちであり、もう少し将来を見据えて夢や目標を持たせられるようなキャリア教育が必要であること、また、もう少しキャリアというものを長期的かつ継続的なところから見ていく必要があるというお話を伺いました。

これらのフィールドワークから学校、家、塾でもないような高校生のための純粋な学びのサードプレイスになりうる場はあまりないのではないか、また、宮城県高校教育課のお話にあるように社会の側にはキャリアに対する学びに大きなニーズがあるのではないかということが見えてきました。そこで私たちのこのプロジェクトにおける受益者となりうる仙台市の高校生60名にアンケートを行いました。その結果、自宅と学校を学びの場とする高校生が多いため、学びの場に対する不満や不足を感じている高校生は少なかったものの、３割程度の高校生は学びの場の不足を感じていました。学びの場の活動用途は「課題や受験勉強のため」が多かったですが、一方で自身のキャリアに関する学びにも一定の関心はあり、卒業時までに大学選択やキャリアについて学ぶ機会の必要性もあると感じました。

以上、３回のフィールドワークとアンケートの結果から、現在活用している学びの場のさらなる環境整備や大学選択やキャリアを学ぶ機会が必要と考えました。それぞれの具体的なアクション案については現在利用できる自習室がある人は、今ある自習室にさらなるキャリアの学びを付け加えられるような形を、固定の自習室を持たない高校生は移動型の自習室を考えて、キャリアの学びを付け加えられるような形を考えました。今後の取り組みについては、肝心要である開催場所の調査や深堀を進めていこうと考えています。さらにこれからの自習室の付加価値を高めていく上でアクティビティやサポーターの深掘り、協力依頼を行っていこうと思います。また、こういった活動の持続的な開催の仕組みを検討して、学都仙台と言われている優位性を今後も保っていければと思いました。

仙台市市民局長　天野 元のコメント

仙台の中小企業は、実は地域の卒業生たちとどう繋がるかを考えています。もしこのサードプレイスによって中高生と仙台の中小企業の双方が出会える場を作ることができれば、そこからキャッシュフローが発生し事業が続く可能性もあるように感じました。ぜひ頑張ってください。

Team C

We can PingPong

トップダウンではなく
ボトムアップのまちづくりを

Mentor 丹野裕太

Member 遠藤綾乃/柏木康平/亀山勇太/柴田嶺/須ケ間博/山田千妃呂/TSENG TINGTING

テーマ

各市民が、やりたいことができる街にする

Field Work フィールドワーク

フィールドワーク①
やりたいことの実施(朝活)

▶

フィールドワーク②
朝活団体.meetさんにヒアリング

▶

フィールドワーク③
仙台市都心まちづくり課にヒアリング

Presentation 最終報告会 ～プレゼンダイジェスト～

これから必要なまちづくりは市民がやりたいことをどんどん出していくことによって、街に人が集うような場所になるというのが私たちの根底にあるテーマです。チームでやりたいことを話し合ってみると、多種多様なやりたいことが出てきましたが、実際にはできていないということが現状としてあります。そのことを踏まえ、なぜできていないのかが課題なのではないかと私たちは考え、ハードルの低い朝活から始めて課題を深堀りしていくことになりました。実施した内容は一緒に新聞を読むことです。コロナ禍ということもあり対面のメンバーとオンラインのメンバーが一緒になって、気になった記事や文面を読んで感想を共有し合いました。この活動でやりたいことを実現するまでのハードルとして「何か取り組みを行うために人を集めたい人(主催者)がいるかどうか」「誰かがやると言った時に集まる人(参加者)が多くいるか、あるいは集められるか」「開催場所があるか」という難しい３つのポイントが挙げられました。

そこで私たちは既に活動している団体、.meetさんが主催の「仙台ゆる～り朝活」という集まりに参加しました。こちらに参加した結果、先ほどの３つの疑問点に対して「あくまで自主的な取り組みであること」「プラットホームを利用することにより参加者をより多く集めることが可能であること」「開催場所はカフェなどを利用することが可能だが、公園などの屋外の公の場所でどうすればいいのかは不明」ということがわかりました。そこで、既存の屋外での取り組みがどのような形で実現しているのか仙台市都心まちづくり課の職員の方々にお話を聞いたところ、仙台市の公園は、全国的に見ても判断基準に柔軟な部分が多く、申請して許可を受けられればやれることが多いことがわかりました。

次に、市民がまちづくり活動を行うためには、受益者の関心を引き出すことができるかという「マインドの壁」、場所をどうやって確保するかという「ハードの壁」の２つの壁があることがわかりました。場所については大義名分を用意すれば解決できそうですが、受益者の関心を引くことについては今現在は解決方法がない状態です。そこで私たちは市民の皆さんに共感してもらうことが大切だと感じ、実践する姿を見てもらうことで「もしかしたら自分もできるんじゃないか」と思わせようと考えました。この２つの壁を壊していくにあたって「マインドの壁」については実際にストリート卓球であったり、朝活というものを私たちのチームが実践していくことで壁を壊していく。そして「ハードの壁」についても大義名分とプラットホームの活用で壊していくことによって、周囲に前向きな影響を与えることができると考えています。

みんなで挙げたやりたいことの中から幅広い層が楽しめて、健康促進などに繋がり、省スペースで低予算である、という実現可能性を考えてストリート卓球を選びました。理由としては、圧倒的に省スペースでできること、子供・大人・障害者・健常者が誰でも親しめるスポーツであるという点です。また、この街がプロの卓球選手を多く輩出している仙台であるということです。以上、市民のやりたいが実現できる街にというテーマで発表させていただきました。

TOHOKU360編集長　安藤 歩美氏のコメント

「市民のやりたいが実現できる街に」っていうのは、本当にこれに尽きるなと感じました。仙台の「いいな」というポイントは面白いことをすると目立ち、人も集まってくるところ。誰でも参加できるような仕組みを作るなどしてぜひ実現していただけたら、仙台の街はとても楽しい街になるのではないかなと感じました。

Team D

定禅寺 コトノハボックス

定禅寺通ならではの
読書体験を提供

Mentor 小野拓也

Member 油利貴昭/橋本朔良/千葉リュウジ/勝又大海/鈴木夢夏

テーマ

定禅寺通を読書しやすい空間に -ちょうどいい街を、ちょっといい街に-

Field Work フィールドワーク

フィールドワーク① せんだいメディアテークにヒアリング

▶

フィールドワーク② 仙台市定禅寺通活性化室 一般社団法人定禅寺通エリアマネジメント代表理事 氏家さんにヒアリング

▶

フィールドワーク③ 個人で定禅寺通で読書体験

Presentation 最終報告会 ～プレゼンダイジェスト～

仙台はどういった街か話し合った時、色々課題は出るものの、それでも「やっぱり仙台ってとっても住みやすいよね」、「何もかもがちょうどいいよね」、そんな言葉が出ました。そんなちょうどいい街を盛り上げるにはどうしたらいいのか、自分ごととしてのまちづくりならみんながワクワクすることがいいのではないかということで意見がまとまり、グループメンバーの好きが重なり合ったのが「本」というテーマでした。また、静かで人通りの多すぎない場所ということで定禅寺通を活動の対象エリアに決めました。

そこで、まずフィールドワーク先をせんだいメディアテークに決め、施設の管理をされている服部さんと橋本さんにそういった取り組みがあったかなどについてお話を伺いました。その中で、すでに市民図書館主催のイベントがあり、日頃から市民図書館には一定程度の来館者がいると感じていることから、改めて定禅寺通において「読書」をテーマにしたまちづくりを行う効果などについて指摘いただきました。一方で、例えば定禅寺通で行われているジャズフェスは徐々に共感の輪が広がって今日まで長く続いていることを教えていただき、定禅寺通や仙台ならではの読書体験というのをまずはやってみればいいのではないかと話がまとまりました。

また、私たちは、何かきっかけ作りをしたいと考え、定禅寺通活性化室の職員の方と一般社団法人定禅寺通エリアマネジメント代表理事の氏家正裕さんに実際にお話を聞いてみました。私たちは難しく考えていましたが、氏家さんのお話を聞き、若者がそれぞれ街について考えたことを情報発信していくことがまちづくりなのだと気付き、まずは自分たちのやりたいことを小さいことでもやってみようという結論に至りました。その後、実際にメンバーがそれぞれ好きな時間に定禅寺通のブックカフェと言われる場所に行くことで、メンバーそれぞれが異なるスタイルで読書が楽しめるんだなということに気付きました。「定禅寺通はやはり読書にちょうどいい街なんだな」というグループ内の共通認識ができたことが実際に足を運んでみて得た貴重な気付きだったと感じています。

フィールドワークや話し合いを重ねた結果、定禅寺通を読書しやすい空間にというテーマを実現できたら仙台はもっと面白くなるというのが私たちの結論です。そこで、宮城県や仙台市にゆかりのある作家さんや作品を生かした、本の都仙台という新たなまちづくりの展開を提案します。ビブリオバトル(本の紹介コミュニケーションゲーム)の実施や作中に登場する場所やお店についての解説ツアー、仙台の秘められた読書スポットを紹介できるマップの作成もできたらと思います。また、肴町公園にあるLittle Free Library(小さな無料図書館)を定禅寺通に設置していきたいです。今後実施されるであろう定禅寺通での大規模社会実験と合わせて期間限定で実施できたらというのが私たちのネクストアクションになります。この小さな無料図書館を私たちは「定禅寺コトノハボックス」と名付けたいです。

仙台市市民局長　天野 元のコメント

歩行者空間をゆっくり歩かせるにはどうしたらいいか、それが今の課題ではないかと感じています。全てのコトノハボックスを制覇してみたいと思う人がいたら定禅寺通の端から端まで歩く、これは素晴らしいアイデアであり、ぜひ実現させていただきたいと思います。

Team E

シェアソビ sEndai

遊びを共有(シェア)し
仙台を遊びがあふれる多様性な街に

Mentor 加賀谷成美

Member 遠藤琴乃/白石彩乃/菅田武嗣/宮城奈々/山本翔太/吉田萌花

テーマ

「遊び」があふれる多様性な街にするには

Field Work フィールドワーク

フィールドワーク①
インスタグラマー
トムと荒木さん
にインタビュー

▶

フィールドワーク②
インフルエンサー
宮城のらむちゃんさん
にインタビュー

▶

フィールドワーク③
各自仙台市内を散歩

Presentation 最終報告会 ～プレゼンダイジェスト～

はじめに多様性という言葉から自分たちがイメージすることや仙台の魅力について話し合い、多様性とは選択肢が多いこと、ユニークさがあることであり、多様性を尊重するということはユニークなものを認め合うことではないかと考えました。そして、都会から来た人も田舎から来た人も仙台は住みやすいと感じる人が多いことを踏まえ、仙台の魅力はユニークな選択肢が集まった街ではないか、という仮説を立てました。そこで身近な人に仙台はどんな街だと思うかをインタビューしたところ、都会すぎず田舎すぎないなどいい意味で生ぬるい街であるものの、誘客力があまりない、中心部以外に遊び場があまりないなど、共通して感じている物足りなさがあることがわかりました。私たちと同世代の若者が感じている、ネガティブな要素を減らせばもっと仙台は面白くなるだろうという考え方をベースに遊び場の選択肢の少なさに着目し、若者の遊び場を増やすこと、遊び方の幅を広げることを目的としました。

遊び場を定義するにあたって、最初のフィールドワークとして宮城県で活躍されているインスタグラマーの方々からお話を聞きました。トムと荒木さんにお話を聞いたところ、「必ずしもスポットである必要はなく目的地に向かうまでの過程も楽しみ方の１つであり、考え方次第で遊び場は広がる」とおっしゃっていました。次にグルメや観光スポットを中心に宮城の魅力を発信されている宮城のらむちゃんさんから、「自分が体験し、いいと思ったものを発信しているが、実際に行って楽しいと感じるかどうかはその人次第。その人が楽しいと思えばどこであっても遊び場になり得る」とアドバイスしていただきました。このフィールドワークを経て、人はまだ知らないことを知ったり探したりする時にワクワクを感じることから、私たちは若者の遊び場を探そうをテーマに自分達ができることを考えました。また、各自45分間仙台市内を歩くというフィールドワークも行いました。普段あまり目を向けないところにカフェや公園を見つけたり、長く住んでいる土地に知らなかったお店を発見したりと大人になっても単元的な楽しみ方ができると発見できました。目的を決めたことでワクワク感を得ることができたのがポイントです。これらのことから仙台市民は遊びを自ら発見し楽しむ、仙台市は街に楽しみを提供するという双方による能動的な取り組みが必要だと考えました。

そこで私たちは仙台市民の能動的な取り組みを促すために、Instagramにおいて”#シェアソビsEndai”をつけて投稿してもらうことで若者たちに自分達の遊び場のシェアを呼びかけることと、参加者が楽しくシェアソビできるリアルイベントの開催、この２つの活動を行いたいと考えています。参加者同士で遊び場を共有することで地域の隠れた自分と違った視点の遊び場を知ることができ、それによって施設の地域利用者の増加による活性化、新しい遊び場所を知れたことによる参加者のQOLの向上が期待できます。しかし、私たち個人や仙台の遊び場には限界があるとも考えており、行政が複数のジャンルで遊び場の選択肢を用意することや全国から人を惹きつけるテーマパークなどを誘致することも必要だと考えています。これらはハードルが高いことも明確ですが、若者に特化した制度を整備するといったことも遊び場充実のための最初の手段としては有効なのではと思います。

仙台をもっと面白くするためには市民の幸福度の向上や、関係人口の増加の期待もある若者の遊びの選択肢を増やすということが重要であるというふうに私たちは結論づけました。仙台をみんな一緒にもっと面白い街にしていきましょう。

仙台市市民局長　天野 元のコメント

今のトレンドは他人の物語に乗るのではなく自分の物語をどうやって作っていくかだと思います。自分たちでマーケットを作り出す、自分たちの発想で楽しさの基準も作り出すというのはすごく魅力的なことです。その点をぜひ伸ばしていってもらいたいと思います。

Team F

もぐら編集局

古着という仙台の文化から
若者へ仙台の魅力発信を

Mentor 石垣直哉

Member 沼澤南/佐藤真穂/原田紗歩/山本知宙/鎌田彩希/山田優志

テーマ

「仙台の文化・カルチャー」を若者に発信

Field Work フィールドワーク

フィールドワーク① 株式会社プレスアートさんにインタビュー

▶ フィールドワーク② 学生団体color webさんにインタビュー

▶ フィールドワーク③ WACOCREATE 岩村さんにインタビュー

▶ フィールドワーク④ Studio Soda Sendaiさんにインタビュー

Presentation 最終報告会 ～プレゼンダイジェスト～

現在の仙台の文化の課題点として「魅力が埋もれていて住民が気づいていない」ということが挙げられました。仙台市民は何もないと言うけど、仙台に移住してきたメンバーからすると仙台は色々な建物があって魅力的だなと思っている一方で、仙台市出身・在住のメンバーからは仙台のおすすめを聞かれても答えられないといった意見も挙げられました。これらを踏まえ、次のワークショップでは仙台の文化や魅力の再発信を行いたいとチームの方針がまとまりました。はじめに、仙台の文化といえば古着のイメージがあることからその切り口で仙台の文化を発信してみることになり、仙台の古着文化を知るため仙台のカルチャー雑誌COLORを出版していた株式会社プレスアートさんと、webで仙台の魅力発信を行っている学生団体color webさんのお二方への取材を決定しました。

まずプレスアートの庄子さんへのインタビューで、古着というものに焦点を当てるのではなく、その古着の奥にある人というところにスポットを当てるのがいいのではないかということになりました。COLORはスナップ写真やその古着自体ではなく、どういう人がいるのかということに読者は興味があり反響が大きかったという話を聞きました。このお話しから古着そのものではなく、その奥に見えるカルチャーや人物がどういうものなのか、その魅力を古着という切り口から皆さんに伝えていくことが重要なのではないかということに気づきました。次にCOLORのweb編集部さんへのインタビューで、仙台の流行の流れなどを教えていただき首都圏の流行が二ヶ月後くらいに来るということが分かり若者が首都圏になぜ流れていってしまうのかもわかりました。これらの取材を踏まえて、古着に人というキーワードをプラスしてその人の面白さを通して仙台の良さも発信していく、そして仙台の文化を楽しんでいる人を動画で発信して知られていない魅力を発信していきたいと考えました。最初は古着ですが、その後の取材はカフェや古着好きの人などあまり枠にとらわれない面白い動画を作っていきたいなと思っています。

次に、チーム名については、仙台の裏側に潜んでいるものを掘り出すということで、もぐら編集局という名前を付けました。さらに、動画のキーワードとしては裏仙台と決めてウラロジ仙台というローカルメディアを運営するStudio Soda Sendaiさんにインタビューを行いました。「裏仙台というコンセプトはウラロジ仙台と近すぎるため、オリジナリティがあって中身が伝わりやすいものがいいのでは」というアドバイスをいただき、視聴者の「巣」を見つけるヒントにしてほしいという新しいキーワードを立てました。一人一人にとっての帰る場所、それこそ遊び場的な存在と考えています。仙台を楽しんで生きている人にとっての「巣」を見て気に入れば自分にとっての巣にもしてほしいというコンセプトになっています。

動画の流れですが、お気に入りの店の人を数珠繋ぎで紹介していくというスタイルになります。例としては、古着屋さんから最初始まって、その古着屋さんが次に紹介したレコードショップの店員さんが次の動画に出てくるというような形になります。

仙台の文化・カルチャーを若者に発信するというテーマで、仙台っていいところだよねと感じるきっかけ作りを情報発信で行っていきたいと思っております。

TOHOKU360編集長　安藤 歩美氏のコメント

仙台ならではの文化を発信するメディアはあまりないと思うのですごく見たいなと思いました。ただメディアは続けるのがとても大変なものです。自分自身のモチベーションを見つけて仙台の文化を発信していただければとても大きなムーブメントになるのではと思うので期待しています。

活動の様子や最新情報を発信中

YouTube

Instagram

Follow Me!!!

Facebook

Twitter

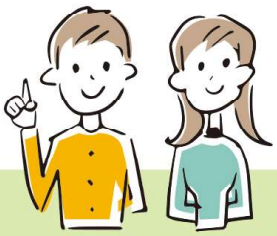
仙台まちづくり若者ラボの活動や最終報告会の様子はYouTubeで、
その他新しい情報などは各種SNSで配信中です♪

若者ラボ参加者の感想

- 市に関わる様々な方に出会うことができてよかった。仙台市をもっといい街にしたいという思いを持っていても行動に移すことがなかったが、実際に活動している方に出会えたことで良い刺激となった。(社会人)
- 活動以前は、自分自身まちづくりも含めて「他人事」という意識の中で生活を送っていた場面が多々あったが、活動を通じてまちづくりも含め様々な事について「自分事」として捉え、行動出来る様になったと思う。(社会人)
- 私たち若者や社会人との協力で、人々を惹きつけられるような新しいモノを生み出せそうだと感じた。(大学生)

若者ラボ参加者から若者の皆さんへ

- 仙台市を一緒に盛り上げていきましょう！まちづくりに興味関心のある仲間が増えます！気軽に参加してみてください！(大学生)
- 迷ったら参加した方が良いです！こんなに貴重な経験なかなか出来ないと思います！(大学生)
- ドキドキでしたが、同世代のいろんな職種の人と出会えてとても楽しかったので、ぜひ参加してみてくださいー！(社会人)
- まちづくりは未来を考える自由な活動です。「こんな事仙台でできたら、あったらいいな」という率直な想いを話してみませんか。(社会人)
- 仙台市のバックアップを受けて、活動を起こすことができる貴重な場です。仙台を自分たちの手でより素敵にしたい、という人はぜひ参加してみてください。(社会人)



編集
発行

主　催：仙台市
協　力：ONE TOHOKU / 仙台市市民活動サポートセンター
事務局：(株)JTB 仙台支店